

清水幾太郎における孤独と社交

大久保 孝 治

はじめに

清水幾太郎(1907-1988)はその生涯で94冊の著作(単著)をものにした。『「社交学」ノート 世紀末に生きる』(1986)は最後から二番目の著作であるが、その3か月後に出版された『私の社会学者たち』(1986)は社会学者や哲学者たちについて書かれた既出の文章を一冊の本にまとめたもので、「あとがき」のみ書下ろしであったから、『「社交学」ノート』を、事実上、最後の著作と呼んでよいだろう。「NESCO BOOKS」という新書の中の一冊で、「こんなに短期間で書いたことはありません。生まれて初めての経験でしょう。」「書き終わった段階から顧みますと、叙述に精粗の差が散見するのは、致し方ないとはいえ、残念に思います」と清水が「あとがき」に書いていることから、語り下ろしだったのではないかと推測されるが、清水幾太郎最晩年の思索のエッセンスがそこで語られていることは確かである。

「まえがき」の中で清水は本書の意図を次のように述べている。「私は、「社交の勧め」という意味で、この小さな本を書きました。とにかく忘れられている社交というものを本気で考えて戴きたい、それを堂々と始めて戴きたい、そういう願いをこめて、この本を書きました。(中略)世の中には、さあ、二十一世紀だ、と浮足立った極楽蜻蛉のような人たちもいますが、真面目に考えれば、この日々、私たちが生きていくのは大変なことなのです。世紀末の今日、益々大変になって行くでしょう。また、或る意味で、私たちは、一人残らず、それぞれの「孤独」に苦しんでいるのです。私の言う社交は、この辛く淋しい生活を、ただ胡麻化すのではなく、多少なりとも有意義なものにする、一段でも二段でも自分を高める、少数ながら信頼出来る友を得る、そのための機会、そのためのスモール・グループのことなのです」(清水 1986: 6-7)。

ここで注目すべきは、括弧付きの「孤独」という言葉である。括弧を付けた意図は一つには強調であろう。しかしそれだけではないように思われる。清水がそのことにどこまで自覚的であったかはわからないが、孤独という言葉にはいくつかの意味がある。タイプの異なるいくつかの孤独があるといってもよい。それぞれの「孤独」——という表現にはそのような含意があるように思われる。本稿のねらいは、清水幾太郎における「孤独」の意味を考察しながら、それとの関連において『「社交学」ノート』を読み解くことである。

1. 「社会関係の消失」としての孤独

『「社交学」ノート』は三章構成になっている。第一章「社交学——理想と現実」では、sociology という英語は、明治の初期、「社交学」と訳されたこともあるという話から始まって、ジnmelの形式社会学における「社交」の概念の検討を経て、「清水研究室談話会」というスモール・グループの誕生の経緯が語られる。

1969年3月、停年まで9年を残して学習院大学を退職した清水は、退職金400万円＋自己資金400万円、合わせて800万円で四谷大京町の野口英世記念館の一室（20畳敷の書斎と10畳敷の応接間）を購入し、「清水研究室」という表札を掲げ、阿佐ヶ谷の自宅から毎日そこに通う生活を始めた。

「清水研究室」の開設当初から14年間、助手を務めた伊東冬美の回想。「私が研究室に勤務を始めた時、先生は、『思想』に「倫理学ノート」を連載しておられた。午前十時から午後一時半まで、執筆や読書のための勉強時間、午後二時半まで中食、中食時から三時半まで来客時間、五時半まで勉強時間、これが研究室での先生の御日課で、（中略）勉強時間の研究室は、透明真空のガラス箱に似ていた。執筆時には、モン・ブランのボールペンが原稿用紙を走る音が聞こえるだけの、読書時には、横文字にアンダーラインを引き、書物の余白に書き込みをする鉛筆の音が聞こえるだけの静寂と、ピンと張りつめた緊張感とが研究室を支配していて、初めの一ヵ月間ほど、私は、ガラス箱の中で、息苦しさだけを感じていた」（伊東 1988: 375）。

おそらく「息苦しさ」を感じていたのは、伊東だけではなく、当の清水もそうだったのではないだろうか。当初は、授業や会議から解放されて、「倫理学ノート」の執筆に専念できるようになった清水だったが、ほどなくして「なんと表現したらよいか判らない暗い感情」に突然襲われることになる。

「ところが、幾日か経って、原稿を書いている途中、ボールペンを握いた瞬間、私は、何と表現したらよいか判らない暗い感情に襲われました。それが何度もありました。この感情は、「物足りなさ」のようでもあり、「空しさ」のようでもあり、「憂鬱」のようでもあり、「淋しさ」のようでもありましたが、とにかく、生まれて初めて知る厭な気分でした。こんな気分が続くようなら、大金を投じて、この新しい研究室を作りながら、そこで徹底的に勉強するどころか、抑々生きていくことができません。一体全体、この感情は何なのか。何と名づけたらよいのか。それを考えた揚句、図らずも、私は「孤独」という言葉にぶつかりました。ああ、これが「孤独」というものなのかも知れない。しかし、不思議なもので、自分の曖昧な気持を仮に「孤独」と呼んでみた時、私は自分の気持が俄に恐ろしいものを感じられて来ました」（清水 1986: 32-3）。

清水は突然自分を襲った「暗い感情」に「物足りなさ」「空しさ」「憂鬱」「淋しさ」といったあれこれの名前を与えてみて、最後に「孤独」という言葉にたどり着いた。それは「生まれて初

めて知る嫌な気分」だった。——筆者はここに疑問を覚えた。おそらく清水の自伝（三冊あるのだが）を読んだことのある人間なら同じ疑問を覚えたのではないだろうか。どういうことかという、二冊目の自伝『私の心の遍歴』（1956）には「孤独な少年」という章があるからである。少年時代の清水が孤独だったとすれば、間もなく62歳になろうとしていた清水が新しい研究室で「倫理学ノート」を執筆していたときに感じた孤独を「生まれて初めて知る嫌な気分」と呼んだのはどうしてだろう。清水がうっかりしたのではないとすれば、妥当な説明は一つしかない。二つの孤独は別のもの、タイプの異なる孤独なのだということである。「孤独な少年」の孤独については後述するとして、ここではまず、清水自身が「生まれて初めて知る嫌な気分」としての孤独をどう解釈したかを見ておこう。

清水は社会学者らしくジンメルに依拠しながら自身の孤独を理解しようとした。ジンメルは名著『社会学』（1908）の中で孤独について次のような考察を行っている。「ある個人が他の個人といかなる相互作用も行わないというたんなる事実は、たしかに決して社会学的なものではない。しかしその事実はまた、まだ孤独の完全な概念を満たしてもいない。むしろ孤独という概念は、それが強調され内面的に重要であるかぎり、たんにいっさいの社会が存在しないことをのみをけって意味するのではなく、むしろまさに社会がともかくも表象されながら、やがては拒否されるという存在状態を意味する。孤独がその一義的な積極的意義をもつのは、社会の遠隔作用——たとえそれが過ぎ去った関係の余韻、もしくは将来の関係にたいする期待であるにしても、あるいは憧憬もしくは望まれた回避であるにしても——としてなのである。」（ジンメル 1908=1994: 89）。このジンメルの繊細で緻密な考察に言及しながら、清水は自身の直面した孤独についてこう了解する。

「なるほど、と私は思い当たりました。学習院を去ることによって、私は、一方では、日増しに怠惰になり、行儀が悪くなる学生たちから解放されたには違いありませんけれども、他方では、主として近代経済学の諸君ですが、この若い同僚たちとの交際も失ったのです。この諸君と中食を共にしながら、或いは、一緒にコーヒーを飲みながら、学問に関係のある談話を交わしていた非常に楽しい時間、それが完全に消えてしまったという背景の下に、私が仮に「孤独」と呼んでみた、あの憂鬱な気持が生まれたのでしょうか」（清水 1986: 34-5）。

清水が感じた孤独は「社会関係の消失」によるものだったのである。行儀の悪い学生たちから解放されたのはよいが、一緒に、大学の若い同僚たちとの楽しい談話の時間も失われてしまったのである。

しかし、それが「物足りなさ」や「淋しさ」に留まらず、「恐ろしいもの」にさえ感じられたのはなぜだろう。それはたんに観念的に孤独が恐ろしかったからではなく、孤独な日常を生きている人たちを実際に知っていたからではなかろうか。『社会学入門』（1959）の中に、1956年の自身二度目となる海外旅行（10月に日本を立ち、ハンガリー事件の渦中にあった東ヨーロッパ各国

およびオーストリア、イタリア、フランスを旅行し、12月に帰国）の最中に会った孤独な老人の姿が描かれた箇所がある。

「私は、例の東ヨーロッパ旅行を終わって、オーストリアの首府ヴィーンへ出てきて安いホテルにしばらく泊まっていた。一階に小さな喫茶室があって、ここで朝食を食うことになっている。朝飯のときだけでなく、私はよくここに坐って、コーヒーやビールを飲みながら、新聞を読んだり、ラジオを聞いたりしていた。エレベーターは修繕中であった。喫茶室に座っていると、コトン——コトン——コトン……という音が遠くからかすかに聞こえて来る。それがだんだん近づいてくる。近づいてはくるが、その近づき方が、イライラするほど遅い。聞こえはじめてから何分経ったであろうか。ようやく、喫茶室の前の段階に、ステッキでやっと身体を支えた七十歳くらいの男が現われる。高速度写真のようなテンポで、私のいる喫茶室へ入ってきて、私たちに挨拶するのが精いっぱい、近くの椅子に身体を投げ出してしまう。老人は壁に向かって坐っている。黙っているが、喫茶室で働いている女性がビールを一杯持っていく。老人は壁に向かったまま、三十分くらいかかって、一杯のビールを飲む。それからステッキを頼りに立ち上がる。コトン——コトン——コトン……が何分間か続いて、やがて聞こえなくなる。私は、毎日のように、この老人に会った。一日に二回会ったこともある。女性に尋ねると、八階であったか、とにかく一番上の——一番安い——部屋に一人で住んでいる、と言う。私は、こういう人間の姿を方々で見た。（中略）事情は何であれ、このような孤独に堪えて生きるというのは、日本人にはなかなかできないことである。私たちは、孤独に堪えて生きる強さというものを持っていない」（清水1959: 233-4）。

ここに描かれているのは「社会関係の消失」としての孤独、その具体的で最終的な形態である。日本人がこのような孤独に堪えて生きることが難しいのは、第一に、家族との共同生活を原則として生きている（生きてきた）からであり、第二に、ヨーロッパの老人たちが持っているような信仰とお金（年金＋資産）が不足しているからである、と清水は指摘している。清水がその老人を見かけたのは49歳のときで、『社会学入門』にそのことを書いたのは52歳のときだった。清水はまだ中年だった。しかるに新しい研究室で「社会関係の消失」としての孤独と初めて直面したとき、清水は62歳になろうとしていた。あの老人の孤独は他人事とはいえない年齢になっていたのである。清水が孤独を恐ろしいものと感じたのは、「孤独に堪えて生きる老人」を目の当たりにした経験、その一種の遠隔作用、別の言い方をすれば、「あのような孤独に自分は堪えられないだろう」という負の予期的社会化もあったのではなかろうか。

清水にとって幸いだったのは、新しい研究室を開設して3カ月ほどした頃に、卒業生や編集者が「時々、先生のお話を伺いたいの、毎月、談話会をやって戴けませんか。雑務は僕たちがやりますから」と申し出てくれたことである。彼らは、毎回、清水の話を書きたかったようだが、「倫理学ノート」の連載を抱えていた清水にはそれは無理だったので、毎月、スピーカーを招いて話

を聞くという形で、その年の9月から「清水研究室談話会」がスタートすることになった。清水はこうして孤独から救済された。

ただし、その後の清水が「社会関係の消失」としての孤独を二度と経験しなかったわけではない。たとえば、三冊目の自伝『わが人生の断片』（1975）を出版したときの「社会関係の消失」は大きかった。清水は『わが人生の断片』の文春文庫版（1985）の「後記」の中でこう書いている。

「正直のところ、本書は、著者の私にとっては苦い本である。なぜなら、この書物を出版したことによって、私は多くの友人を失ったのであるから。本書で、私は誰にも非難の言葉を投げつけはしなかった。ただ、彼らと私との考え方の相違は述べた。しかし、それだけのことで、多くの友人は私から去って行った。本書は、若い読者に、彼らの知らぬ過去を蘇らせてくれるかと思い、それを私は願っている。しかし、本書の出版によって私が失った友人との関係は、二度と蘇ることはないであろう」（清水 1985: 307）。

学習院大学の若い同僚たちとの関係の消失は、清水が学習院大学から離れた結果であった。それに対して、『わが人生の断片』の出版によって経験した友人関係の消失は、長年の友人たちが清水から離れて行ったことによるものである。同じく「社会関係の消失」とはいても、前者は能動的なものであり、後者は受動的なものである。清水は『わが人生の断片』の出版による友人関係の消失を、ある程度、覚悟していたであろうが、実際に起こったことは、その覚悟のレベルを大きく越えるものであったようである。伊東冬美が「一方で、古い御友人を失われたと致しましても、もう一方では、この御本によって新しい御友人を得られました」と慰めの言葉をかけたとき、清水はこう答えたという。「新しい人たちとは、偶然、街角で出会ったようなものです。この人たちと僕とでは、過去が違います。街角を過ぎれば、僕はまた、この人たちと別の道を行くのかも知れません」（伊東 1986: 379）。事実、それから5年後、『日本よ国家たれ 核の選択』（1980b）を出版したとき、「『わが人生の断片』御出版のころ得られた新しい御友人とも、慌ただしく別れることになった」（伊東 1986: 380）のである。清水の人生にはさまざまな「街角」があったが、おそらくそれが最後の「街角」であったろう。

2. 「仲間外れ」としての孤独

『「社交学」ノート』第二章「社交の話題——私たちのケース」は、1969年9月から1982年1月まで続いた「清水研究室談話会」の記録である。

「清水研究室談話会」を運営していくにあたって、清水と幹事たちはいくつかの方針（社交の原則）を立てた。第一は、参加人数に制限を設けること。談話会の初回の参加者は二十名ほどだったが、回を重ねるにつれて参加者が増えて行った。「しかし、談話会がスモール・グループであるためには、つまり、参加者が互いに知り合いになり、そこにパーソナルな関係が生まれるため

には、精々のところ、五十人くらいが適当で、それを越えたら、face-to-face の関係は成り立ちません。(中略) 談話会と限らず、様々な社交の形態があると思いますが、どんな場合でも、この face-to-face の関係を大切にしなければなりません」(清水 1985: 40-1)。

第二は、スピーカーの話がインフォーマルな(平明で分かりやすい)ものであること。多くの場合、スピーカーは何らかの分野の専門家であるが、専門家が専門的なテーマを専門用語を多用して話したのでは、一般の参加者は話についていけない。「スピーカーの話がインフォーマルであると、話が終わった後、参加者も気が楽になって、ドンドン質問するようになります。更に、参加者同士の間会話が始まります。(中略) この自由な会話こそ、また、それを楽しむということこそ、社交の本質なのです。他に何があっても、自由な会話の喜びがなかったら、如何なる社交も成り立ちはしません。」(清水 1986: 41-2)。

第三に、スピーカーの話が始まる前に参加者全員が簡単な自己紹介を行うこと。そうすることで彼らの間に親密感が生まれやすくなるだろうことは容易に想像されるが、興味深いのは、それがもたらすスピーカーへの影響についての清水の説明である。「スピーカーにとっては、三十人とか四十人という相手は、まことに中途半端なもの、話しづらいものなのです」と清水は経験的に語る。「この人たちは何者なのか、何を考えているのか、自分が何かを話した場合、彼らの一人一人はそれをどう受け取り、それにどう反応するのか、敵なのか、味方なのか。こういう不安に私は何度となく苦しんだことがあります」(清水 1986: 44)。参加者の自己紹介によってこうしたスピーカーの不安が消えて、スピーカーの話もインフォーマルになり、座談的になって行く。

第四は、参加者全員の平等ということ。談話会の参加者は多様であったが、個人の社会的地位によって彼らの間に序列のようなものが生まれてしまうことを清水は危惧した。しかし、それは杞憂であった。「度重なる自己紹介によって互に職業や地位をよく知っているにも拘らず、談話会には一つの平面のようなものが自ら生れて、そこに全員が立つようになりました。二尉や三尉の自衛隊員が元陸相や元海将に対して卑屈な態度に出ることもありませんでしたし、国会議員が隣の椅子に座っている主婦や学生に威張るようなことも全くありませんでした。みんなが平等に談笑していました」(清水 1986: 49)。

こうした「清水研究室談話会」の運営方針(社交の原則)について説明する中で、清水は「自己紹介」にまつわる「苦い思い出」を語っている。

「実は、自己紹介については、私は苦い思い出が一つあるのです。いいえ、談話会とは関係はありません。時期は、談話会が始まる以前、私がまだ学習院に勤めていた頃かと思いますが、大河内一男が「アダム・スミスの会」というのを主宰しておりまして、私にも入会を勧めてくれました。一年に二回か三回ぐらいの頻度であったでしょう、夕方、東京駅の八重洲口に近いビルの地下にあるレストランに二十人ぐらいの研究者が集まって、先ず、食事を摂り、それから、スピー

カーの研究報告を伺うというのでした。早速、彼の勧めに従って、このレストランへ出かけました。初対面の人が多いだろうと思って、何枚も名刺を持参して、イソイソと出かけました。レストランに入ったら、彼を初め大勢の研究者が既に来ていました。/「やあ、今日は」と私は彼に声をかけて、彼の近くの椅子に腰かけました。見渡すと、知らない人ばかりです。私は、彼が新入会員の私をみんなに紹介してくれるものと頭から思い込んでいたのです。しかし、彼は、「やあ」と言うだけで、私をみんなに紹介しないのです。食事が始まったら、紹介してくれるのかと思っていましたが、やはり、紹介しないのです。後から考えますと、真先に私が自己紹介すべきだったのです。しかし、そのキッカケを誰かが作ってくれなければ、図々しく自己紹介することも出来ないものです。/とにかく黙って飯を食い、黙って誰かの報告を拝聴し、「さよなら」と彼に言うだけで会場を出ました。その次の会合も同じでした。第二回なのに自己紹介するというのも季節外れのようなもので、黙って飯を食い、黙って誰かの報告を拝聴し、みんなが談笑しているのを聞いているうちに、本当の「孤独」を感じました。それから何回か出席しましたが、孤独が辛くなるばかりで、次第に欠席することが多くなり、到頭、脱会しました。一人の名前も知らず、一人と話し合うこともなく、況して、一人の友を得ることもありませんでした」(清水1986: 46-7)。

「アダム・スミスの会」で清水が感じた「本当の孤独」というのは、清水が新しい研究室で経験した「生まれて初めて知る厭な気分」、すなわち「社会関係の消失」としての孤独とは別のタイプの孤独である。名前を付けるとすれば、「仲間外れ」としての孤独ということになるだろう。集団のメンバーの相互作用（コミュニケーション）のシステムから排除されているときの気分である。空間的には排除されていないので、排除された者は居場所のなさを感じながら目の前で他のメンバーが相互作用している様子を黙って見るほかはなくなる。他のメンバーは彼のことを無視しているわけで、それが無自覚なものではなく、意図的なものであった場合は一種の「いじめ」と呼んでよいものだろう。「アダム・スミスの会」の場合は無自覚的なものであったと思われるが、主催者の大河内一男も他のメンバーも明らかに新参者への社交的配慮に欠けていたと言わざるをえない。

いまのエピソードは「自己紹介」にまつわる「仲間外れ」であったが、「インフォーマルな話題」にまつわる「仲間外れ」のエピソードも語られている。

「どうも、再び話が横道に逸れてしまうようです。「歴史シリーズ」(談話会の連続テーマの1つで、1973年1月から5月まで続いた——引用者注)の暫く前であったと思いますが、堀米庸三ともう一人、X教授としておきましようか、それに私の三人が、新宿副都心に聳え立っている一つのノッポビルの最上階のレストランで、夕食を共にしたことがあります。堀米教授とX教授とは、西洋中世史の専門家なのです。それは結構なことですが、テーブルに就くや否や、挨拶も何もあったものではなくX教授が堀米教授に向かって西洋中世史に関する研究文献の話を始め

たのです。／堀米教授は少し受け身のようでしたが、これに答える。相槌を打つ。その話が一段落すると、X教授が別の文献を持ち出す。それが済むと……という工合で、二時間以上でしょうか、二人だけが西洋中世史の研究文献の話をしているのです。／今、こんな些事を思い出すのは、社交の問題が私の念頭にあるためでしょう。三人とも大学教授というものを経験しているのですから、それだけでも、共通の話題が幾つもある筈です。しかし、それは話題にならずに、まるで私という異物が存在しなかった方が良かったかのように、西洋中世史の文献の話に始まり、それで終わってしまいました。誰も私の意見を求めませんでしたし、求められても、答えようがなかったでしょう。私は、超高層ビルの窓から、黙って東京の灯を眺めていました。そして、別れて帰りました。後から考えて、途中で席を立たなかった自分が情けなくなって来ました。(中略)／堀米教授とX教授との話題が、もう少し広がったら、私は喜んで会話の中へ入って行くことが出来たでしょう。そして、平素の不勉強を補うチャンスを与えられたことでしょう。しかし、素人の私は、二人の眼中になかったようです。況して、社交の原則、というより、人間としての礼儀も何処かに消えてしまうくらい、二人とも学問に熱心だったのでしょう」(清水 1986: 131-3)。

同じく「仲間外れ」としての孤独とはいっても、「アダム・スミスの会」でのそれは20人ほどのスモール・グループにおけるものであったのに対し、今度の場合は、堀米教授とX教授と清水というミニマル・グループにおけるものである。社会学では社会というものを人と人との相互作用として捉えるが、その意味では、最小の社会は二者関係である。しかし、二者関係というのは特殊な社会で、そこには第三者というものが存在しない。したがって、そこには対立はあっても、孤立というものはない。「仲間外れ」が生じる社会の最小単位は三者関係なのである。

「仲間外れ」としての孤独は、集団から集団への遍歴という視点から清水の自伝を読んでいく際のキーワードであるが、その原体験といえるものが『私の心の遍歴』(1956)の中で出て来る「あこがれの避暑」のエピソードである。それは清水が小学校3年生の夏休みのときの出来事である。体があまり丈夫でなかった少年清水は。体に良いからと、知り合いの医者の家族と一緒に、初めて親元を離れて、医者的一家が経営する福島県の横向温泉の宿でひと夏を過ごすことになった。清水はわくわくした気持ちで出かけたが、宿は便所紙の代わりに大きな落の枯葉が置かれているような山奥のさびれた一軒宿で、食事も粗末なものだった。

「宿に着いて、いろいろの事情が判つて来るにつれて、私は自分の立場がないことに気がつきました。この宿にいる人間は、滞在客か、医者家族か、その使用人か、この三種類なのですが、私だけはそのどれにも入らないのです。私は、宿料を払うお客ではありません。むしろ、朝と午後、お客の部屋へ、お茶と梅干とを運ぶのが、いつの間にか、私の仕事になつていました。私は、お客ではありません。また、私は医者家族と同行して来はしたものの、勿論、この家族の一員ではありません。私と同年輩の息子はひどく乱暴で、時々、滅茶苦茶なことはやります。しかし、私は、どうしても、本気で彼と喧嘩する気持になれないのです。何となく、遠慮せねばならぬ立

場にいるような気がするのです。(中略)そして、私は使用人でもないのです。使用人は私に向かってゾンザイン言葉を使いしますが、自分たちの仲間とも見ていないようです。私は、一体、何者なのでしょう。私は、どこにいても邪魔なような気がして来ました」(著作集 10: 280-1)。

ここで語られている「仲間外れ」としての孤独が、すでに紹介した二つの「仲間外れ」のエピソードと違って、第一に、「宿にいる人間」というスモール・グループが一様なメンバーから構成されているわけではなく、「滞在客」「医者家族」「使用人」という3つの下位集団ないし下位カテゴリーに分かれていて、そのいずれにも清水は所属していないということである。帰属する集団(カテゴリー)がないことは、「私とは何者なのか」というアイデンティティの危機につながる。第二に、その温泉宿は周囲から空間的に隔離されていて(山奥の一軒宿)、時間的にも隔離されている(夏休みが終わるまで東京に帰ることができなかった)、社会学者ゴフマンのいう「全制的施設」(total institutions)、全寮制の学校や入院施設や刑務所や兵営などのようなものであるということである。「アダム・スミスの会」や堀米教授・X教授との会食で経験した「仲間外れ」の孤独は、せいぜい数時間のもので、そこからの離脱は任意であったが、温泉宿での孤独は長期にわたる強制的なものであった。結局、2週間ほどした頃、温泉宿での清水の様子を人伝に聞いた父親が彼を迎えに来て、清水は東京に戻るようになったのだが、そのときの体験はトラウマと呼んでいいほど辛いものだった。

「他人の眼から見れば、これは誠に小さな事件です。けれども、九歳の私にとつては、実に大きな事件でした。これは、後に関東大震災に遭つたり、徴用員としてビルマへ連れて行かれたりしたのに劣らぬ大事件でした。この大事件のために、私は一層臆病になつてしまつたようです。ウカウカと見知らぬ世界へ踏み込んだら、どういうことになるか、それを身にしてみて感じたのでしょう。とにかく、すっかり臆病になりました。(中略)毎朝、眼が覚める度に、眼を開いたら、まだ、横向温泉の玄関脇の一室に寝ていないか、それが恐ろしくて堪りませんでした。父にも母にも黙っていましたが、毎朝の恐怖は、三年間ばかり、つまり、小学校を卒業する頃まで続きました。今でも、時々、横向温泉の夢を見ます」(著作集 10: 283-4)。

ちなみに関東大震災やビルマでの体験が清水の三冊の自伝で繰り返し語られているのに、それらに劣らぬ「大事件」であった横向温泉での事件が、二冊目の自伝でしか語られていないのはなぜかという疑問については別稿(大久保 1997)で詳しく論じたことがあるので、ここでは簡単に述べるにとどめるが、要するに、二冊目の自伝を執筆中だった時期に、当時清水が深くかかわっていた平和運動(内灘村の米軍基地反対運動)の組織の内部で清水は「仲間外れ」の孤独を経験しており、それが「ウカウカと見知らぬ世界へ踏み込んだら、どういうことになるか、それを身にしてみて感じた」少年時代の記憶を呼び起こしたのである。おそらくこの共鳴作用は清水の紆余曲折した社会的遍歴の中で何度も起こっていたことである。

3. 「孤高」としての孤独

ここまで孤独の二つのタイプ、「社会関係の消失」としての孤独と「仲間外れ」としての孤独についてみてきたわけだが、二冊目の自伝『私の心の遍歴』に出て来る「孤独な少年」の孤独はまた別のタイプの孤独である。実は、「孤独な少年」とタイトルが付けられた章の中に「孤独」という言葉は出てこない。出てくるのは「ひとりぼっち」という言葉である。その部分を抜き出してみよう（傍点は清水自身による）。

「私は、書物というものに縋つて、古い澱んだ空気の中から少しずつ這い出して采ました。私は、無意識の裡に、現状から抜け出す道を書物に求めていたのでしょう。（中略）けれども、脱出の道を書物に求めている間に、いつか、私はひとりぼっちになつてしまつたようです。周囲を見廻しても、誰もいないのです。しかし、本来なら、現状から連れ出してくれるものは、何も書物に限つた話ではないでしょう。良い友だちがあつたら、ひとりぼっちにならずに、しかも、現状から抜け出す道が開かれた訳でしょう」（著作集 10: 267）。

この引用部分を理解するために、清水の生い立ちについて最低限の注釈を加えておく必要があるだろう。第一に、清水は日本橋の生まれで、祖父は旗本であったが、維新で禄を失って、竹屋という時代遅れの商売を始めた。親類縁者たちは「世が世なら」という言葉を頻繁に口にしていた。没落の湿った空気の中で清水は育った。第二に、病弱だった清水は書物を病床の友とした。書物は清水が生きている世界とは別の世界を彼に与えてくれるものだった。第三に、清水には必ずしも友人がいなかったわけではない。少年清水が自分を「ひとりぼっち」だと感じたのは、友人がいなかったからではなく、彼らとは住む世界、歩んでいこうとしている人生が違っていたからだだった。小学校入学前後の友人たちについて清水はこう語っている。

「両国の近くには、横山町とか馬喰町とかいう有名な問屋町があり、従つて、そういう問屋の子供たちが私の友だちには沢山いました。そして、今もハッキリ覚えています、問屋の子供たちは、家が近いせいもあり、また、商売が似ているせいもあつて、明らかに、一つのグループを形作っていました。学校のクラスでも、有力な塊になつていました。句論、私は、その中に友だちを持っていますが、しかし、どの点から見ても、このグループに属してはいません。他面、両国という土地は、同時に、柳橋及び浜町という、これまた有名な花柳界によつて挟まれています。両国から隅田川を上れば柳橋、下れば浜町ということになります。そのため、私の家の近くには、芸妓屋、待合、料理屋があり、そういう水商売の家の子供たちも、一つのグループというほどではありませんでしたが、とにかく、私たちの仲間にはいました。（中略）しかし、私は、このグループにも入つていませんでした」（著作集 10: 267-8）。

周囲の子どもたちが「問屋街の子どもたち」と「花柳界の子どもたち」という二つのグループに分かれていて、清水はそのどちらにも所属していなかったというのは、横向温泉の宿における

「仲間外れ」と似ているが、それぞれのグループに「友だち」や「仲間」はいたそうだから、「仲間外れ」とはニュアンスの違う、別のタイプの孤独であるように思われる。そのことは次の語りを読むとよりはっきりする。

「私が何とかして抜け出そうとしていた現状、その現状は、一部分、あの問屋町や花柳界によつて組み立てられていたような気がするのです。簡単に言つてしまえば、あの古い澱んだ空気も厭ですし、同時に、問屋町も花柳界も厭なのです。それ等を合わせた全体から脱出したかつたのです。(中略)そして、厭になつた結果、問屋町の子のグループにも、花柳界の子のグループにも入らなかつたように思うのですが、実は、その逆で、私がどのグループにも融け込む資格を欠いていたために、次第にひとりぼっちになつて、その結果、あの華かで賑かな問屋町も花柳界も厭になつてしまつたのかも知れません。何れにしろ、こうして、小さいくせに、何となく、周囲の世界との間に一種の隙間を感じずるようになって来ました」(著作集 10: 269-70)。

ここで少年清水が感じている孤独は、少年には似つかわしくない言葉かもしれないが、「孤高」としての孤独と呼ぶのが相応しいだろう。たんにある平面上で周囲の人間たちから距離を置くだけでなく、より高い平面を目指して、現状の平面からの脱出を図ろうとする、そうした立体的な構造を有しているのが「孤高」としての孤独の特徴である。「横向温泉」の事件のときの少年清水にとって、孤立した状況からの脱出は家族のいる東京に帰るという平面的（地理的）な移動であつたが、古く澱んだ世界からの脱出は立体的（階層的）な移動、具体的には学問的な立身出世ということであつた。温泉宿での少年清水は「私は、一体、何者なののでしょうか」というアイデンティティの危機を感じたが、高等小学校に進んだ頃の少年清水は「インテリになりたい」とはっきりと自覚するようになっていた。

「何になりたいのか。何でもよいのです、要するに、インテリでありさえすれば。インテリという言葉は知りませんでしたが、今ならインテリというところですよ。インテリでありさえすれば、何でもよいのです。ああでもない、こうでもないと考えた末に、いや、考える前から、私の心を占領していたのは、インテリというものでした。何でもよいから学問と縁のある人間になりたい。それだけでした」(著作集 10: 291)。

インテリになるための方法は、少年清水にとってとりあえず本を読むという行為であつたわけだが、本を読むという行為にもっとも相応しい場所は図書館であつた。清水の通っていた千代田小学校は清水の家の筋向いにあり、ここに両国図書館という夜間専用の図書館が併設され、少年清水はここに毎日通つた。

「図書館は三時開館で九時閉館、要するに、同じ建物が、三時までは学校で、三時から、図書館になるのです。しかし、不思議なもので、既に見飽きた建物でありながら、夜になると、廊下も教室も石段も、電燈の光に照らされて、全く別の、しかも、秘密めいたものに見えて来るのです。私自身、夜の建物に踏み込んだ瞬間、何か別の人間になつたような気がして来るのです」

(著作集 10: 273)。

この簡易で小さな両国図書館は「周囲の世界との間に一種の隙間を感じるようになって」いた少年清水にとってほとんど唯一の居場所といえるものであった。そして同時に、学問の世界へと通じる脱出口でもあったろう。実際、彼は小学6年生のときに日本橋から本所に引っ越した後も、なんと大学に入学するまで、ここに通い続けたのである。そして清水はここで一人の「友だち」を得た。図書館の受附をしていた小倉という青年で、旧藩主山内家に寄寓して、苦学しながら何かを勉強していた。

「この人は何の学問かは知りませんが、学問を志している人です。この人は、問屋町とも関係がない。勿論、花柳界とも縁がない。(中略) 苦しい生活に堪えながら、ナンバリングで閲覧券に番号をつけながら、高遠で、ハイカラな学問の世界へ目を向けている人です。やがて、私はこの人にまつわりついて、離れないようになりました」(著作集 10: 275)。

同級生と一緒にいるときは「孤高」としての孤独(ひとりぼっち)を感じていた少年清水だったが、両国図書館は自分と同じような「孤高」の人が集まる場所で、しかも「孤高」の者同士が交流できる場所でもあったのである。

「インテリ」になること、学問的な立身出世をめさずことは、人が「孤高」としての孤独を感じやすくなる一つのケースである。「インテリ」のほかにどんな言葉を代入することができるだろうか。晩年の清水の思想の中では「貴族」という言葉がそれに該当する。『倫理学ノート』(1972)の結末を清水はこう結んでいる。大変印象的で、かつ物議をかもした文章だった。

「オルテガ・イ・ガセットは、人間を二つのグループに分けて、一を「貴族」と名づけ、他を「大衆」と名づけた。これらの名称は、貧富、職業、学歴などと関係があるものでなく、ただ、前者は、無理と知りつつ、敢えて自分に高い要求を課し、それへ向って生きる少数者であり、後者は、自分に何一つ要求を課することなく、現にある自己のままで生きる多数者である。それが望ましいか否かは別として、現実の社会には、こういう二つのグループがあるようである。自然的欲望からの自由において、自ら高い規範を打ち樹て、それへ向かって自己を構成して行こうと努力する少数者と、自然的欲望の満足に安心して、トラブルの原因を外部の蔽うもののうちにのみ求め、自己の構成に堪え得ない多数者。飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は、すべての「大衆」に「貴族」たることを要求するところから始まるであろう。しかし、それが不可能であるならば、「大衆」に向かって「貴族」への服従を要求するところから始まるであろう」(著作集 13: 345-6)。

「始まるであろう」と終わっているが、それもまた不可能であると清水は考えていただろう。『倫理学ノート』は現代社会=大衆社会における倫理(道徳)の不可能性を論じた書物である。しかし、すべての大衆ではなく、一部の貴族は「貴族」たらんと欲するかもしれない。「貴族になりたい」、「無理と知りつつ、敢えて自分に高い要求を課し、それへ向って生きる少数者」。『社交学』ノート』はそうした読者のためのガイドブックである。

『「社交学」ノート』第三章（最終章）では、現代人が置かれている「世紀末」的状況を百年前のジンメル時代と比較しながら、3つの「M・Mシステム」——「マン・マシン・システム」（人間と機械との共存）、「マン・マネジメント・システム」（組織の一員としての人間）、「マン・マス・システム」（大衆社会）——という視点から論じ、そうした状況を生き抜いていくために社交の必要が説かれている。

すなわち「マン・マシン・システム」の中で、人は機械の支配する生活から脱して、パーソナルなもの、face to faceな関係を求める。「マン・マネジメント・システム」の中で、人は組織の一部（部品）という限定された役割だけを演じる生活（人生）から脱して、もっと全人格的な自己表現の場を求める。そして「マン・マス・システム」の中で、人は大衆から自分を区別し、大衆文化の波に飲みこまれまいとする。しかし、3つの「M・Mシステム」に抗することは、世の中の大勢、時代の趨勢からの脱出を図ろうとすることだから、人をしばしば孤独にする。その孤独は「孤高」としての孤独である。そしてそうした孤独な人々を救済する、あるいは慰めるのが、スモール・グループでの社交であると清水は考えるのである。清水は「談話会」の参加者がしだいに増えて行った（それゆえ人数制限を設けなくてはならなくなった）理由についてこう述べている。

「メンバーの増大の傾向はなぜなのか。それを私は考えざるを得ないのです。何度も考えた場合、私が仮に「孤独」と呼んだ辛い気持、勿論、それとはまったく違うでしょうけれども、それと何処かで相通じるような気持が多くの方々にもあるのではないかと思うようになりました。みなさんと私とでは、職業を初めとして、殆どすべての点で異なっているのですが、「或る満たされないもの」とでも申しましょうか、それを私どもは思い思いの形で共有していたのではないか。そんな気がするのです」（清水 1986: 226-7）。

孤独（孤高）の少年清水の居場所が両国図書館であったように、「清水研究室談話会」は3つの「M・Mシステム」から脱出したい人たちの居場所として機能したと清水は考えた（考えたかった）ようである。図書館では原則として談話は禁止されているが、社交の本質は談話であり、「清水研究室談話会」は、孤独な人たちがたんに集まるだけでなく、そこでコミュニケーションが図れる場所なのである。

ただし、3つの「M・Mシステム」の中で生き抜いていくための方法論として清水はスモール・グループでの社交だけを考えていたわけではない。「別の文脈で見れば、私は、「剛毅なもの」を初めとするいくつかのものを挙げたいのですが、今は、文脈が違うのです」（清水 1986: 231）。清水がここで示唆している「剛毅なもの」とは「国家」である。かつて『社会心理学』（清水 1951）では、3つの「M・Mシステム」の中で生きる人間の消極的適応として「家族」と「国家」への逃避が語られていたが、晩年の清水においては、スモール・グループでの「社交」と個人生活の平面を越えた「国家」への献身（愛国心）が積極的適応としてワンセットで考えられている

のである（大久保 2007）。

おわりに

『「社交学」ノート』は「清水研究室談話会」の盛衰史としても読むことができる。もっとも「社交の勧め」というのが眼目であるから、記述は「盛」の方に片寄り「亡」についてはあまり触れないのはしかたのないことである。その中で、「ジャーナリズム・シリーズ」（1975年1月から同年6月まで）の最後のスピーカーとして清水が「ジャーナリストの経験」という題で話をしたときのエピソードは目を引く（清水は13年に渡って続いた「談話会」で13回、つまり一年に一度という頻度でスピーカーになった）。「談話会では最も頻繁に話して参りましたが、正直のところ、昭和五十年六月に話したときほど不愉快なことはありませんでした」（清水 1986: 148）と書いているのである。そのとき清水は、ジャーナリストとしての自分の文章は検閲制度の下で鍛えられてきたという趣旨の話をした。具体的には、「烈しい、強い言葉を避け、穏やかな、静かな言葉を選ぶようになった、一本調子の文章ではなく、意味が裏に隠れているような文章を書くようになった」というわけである。ところが、戦後、検閲制度がなくなったために、読むに堪えないような文章が出回るようになった。いま求められていることは、執筆者自らが自分の文章を抑制し、鍛え上げていく姿勢であると。

「私が談話会で話したのは、大略、以上のようなことでした。ところが、まったく虚を衝かれたという感じでしたが、私のスピーチが終るや否や、何人かの人たちから、「先生は、戦前の検閲制度を復活しろ、とおっしゃるんですか」という質問が出されました。それも聊か怒気を含んでいるような気がしました。「いや、そうではなくて……」と私の真意を繰り返しましたが、最後まで納得が得られなかったように思います。私の話し方も下手だったのですが、同時に、戦前から筆一本で生きて来た私の経験が、どうしても、万事自由の戦後生まれの人には伝わらなかったのでしょう」（清水 1986: 157）。

「貴族」の場合もそうであったように、この「検閲」に関しても、清水がいわんとしているのは内面的な、精神的なことがらであって、決して貴族制度や検閲制度の必要（ましてや復活）のことではないことは明らかなのだが、戦後民主主義教育の下で育った世代には「貴族」や「検閲」はアプリアリに負の言葉なので、たとえ内面的・精神的な意味で使われていても拒否反応が生じるのだろう。

これは別の回（1974年3月）のエピソードなのだが、清水が山本夏彦にスピーカーを依頼したとき、山本から「厄介な議論を吹っかける人はいませんか」と質問されて、「そんな人は一人もおりません」と清水は答え、引き受けてもらっている。「議論」も「会話」の一種なのでしょうが、楽しい会話が社交の柱であるのに対して、多くの場合、議論は社交を破壊する危険があります」（清水 1986: 42）。こうした危険は「談話会」の最後のシリーズとなった「戦後を疑う」で

いよいよ大きくなったのではないかと思われる。

「昭和五十三年に入りますと、「戦後を疑う」というシリーズが始まりました。これは、五十四年、五十五年、五十六年、五十七年と、結局、談話会が一旦中止するまで続きました。大シリーズであります。／何しろ、敗戦及び占領という異常事態から始まった「戦後」は、もう三十年以上も続いているのです。その間、異常事態から生まれた多くのものが、そのまま、自明のものとなって来ているのです。「平和」もそうです。「民主主義」もそうです。「憲法」もそうです。幾らでもあります。そういうものを一つ一つ見直す、批判する、というのですから、これに要する期間が自然に長くなったのです」（清水 1986: 158）。

清水もこの「戦後を疑う」シリーズの最初のスピーカーとして2回連続で「戦後を疑う」「戦後を疑う一統」という題で話をしている。その要旨は「戦後思想の根本にあるのは治安維持法への復讐である」という刺激的なものであるが、論じられたのは、自由な社会（国家）はその自由を脅かすような集団に対しても活動の自由を与えなくてはならないのか、という「自由のジレンマ」についてである（清水 1980a）。「治安維持法」は「貴族」や「検閲」以上に負の言葉であるから、当然、「厄介な議論をふっかける」参加者はいただろうと思われる。しかし、清水は「検閲」について語ったとき以上の不愉快な経験はなかったようである。おそらくこの時期、「厄介な議論をふっかける」ような人は「談話会」から遠ざかっていたのではなかろうか。それを裏付ける証言を伊東冬美はしている。「新著『オーギュスト・コント』出版の翌年、昭和五十四年十月、先生は、軍事科学研究会を組織され、二週間に一度くらいの頻度で、元自衛隊最高幹部の方々、研究室で軍事問題の研究を進められるようになった。軍事問題の研究は、突然降って湧いたものではなく、清水研究室談話会から自然に流れ出た来たものである。（中略）外国旅行の感想、ジャーナリズムの事情、教育問題、と多様な点の上を歩いて来た談話会は、昭和五十三年ころより、軍事問題の線を辿るようになった。同時に、出席者の顔ぶれも変わった」（伊東 1988: 397-8）。清水が「談話会」の方針（社交の原則）の一つである「参加者全員の平等」について語ったときに、「二尉や三尉の自衛隊員が元陸将や元海将に対して卑屈な態度に出ることもありませんでした」という例を出していたが、この箇所を読んだ読者は、参加者の間の平等性よりも、参加者の中に自衛官がそんなにいるのかという事実の方に注意が向いたであろう。それでもある時期までは、主婦、サラリーマン、学生、新聞記者、大学教授、評論家……とメンバーの異質性は担保されていたのだろう。それがしだいに同質化されてきたということである。メンバーの同質性は清水が「談話会」との対比で批判的に語った「勉強会」の特徴である。

伊東は清水に何度も「談話会」の路線の変更を訴えたそうだ。「私は二、三度、先生に申し上げた、「路線を変えましょう。」（中略）「右旋回」の声が上がり、風当たりが強くなった時期、私は、また申し上げた。「軍事は、もう止めに致しましょう。国家も大事でございますけれども、私には先生の方が大事でございます。」国家が亡びれば、日本人全部が亡びるのだから、私の言

葉は、愚かである。(中略) 人の怖がる「男の仕事」を、しかし、誰かがせねばならぬ「男の仕事」を、先生は、進んで我が身にお引き受けになった。「男の仕事」を背負って軍事の道をお歩きになった先生は、殉教者のように高潔であられ、孤高であられた」(伊東 1988: 380-1)。

「インテリ」を目指した少年清水が「孤高」であったように、「貴族」であらんとして、「愛国者」であらんとした晩年の清水も「孤高」の人としてもっとも身近なところにいた人物の目には映っていた。

参考文献

* 清水の著作については、『清水幾太郎著作集』(講談社, 1992-3) に収められているものは引用にあたって収録されている巻と頁を示した。

伊東冬美, 1988, 「清水研究室の十四年」, 『中央公論』10月号, 374-82.

大久保孝治, 1997, 「自伝の変容—清水幾太郎の三冊の自伝—をめぐって」, 『社会学年誌』38号, 103-20.

大久保孝治, 2007, 「清水幾太郎における「庶民」のゆくえ」, 『社会学年誌』48号, 103-26.

清水幾太郎, 1951, 『社会心理学』岩波書店 (著作集9所収).

清水幾太郎, 1956, 『私の心の遍歴』中央公論社 (著作集10所収).

清水幾太郎, 1959, 『社会学入門』光文社.

清水幾太郎, 1972, 『倫理学ノート』岩波書店 (著作集13所収).

清水幾太郎, 1980a, 『戦後を疑う』講談社 (著作集17所収).

清水幾太郎, 1980b, 『日本よ国家たれ 核の選択』文藝春秋 (第一部「日本よ国家たれ」のみ「新しい戦後」という当初のタイトルで著作集17所収).

清水幾太郎, 1985, 『わが人生の断片』「文庫版後記」文春文庫 (下巻), 306-7.

清水幾太郎, 1986, 『「社交学」ノート』ネスコ (日本映像出版).

ジンメル, 1908=1994, 『社会学』(上巻) 白水社.